緒言三則

贄川他石

一　編纂をお引受けするまで

大正十四年の初冬頃でした。故加藤氏が故沼波先生の御紹介で御訪問になられまして、日本名著全集發行の計畫のお話があり、江戸文藝之部を其第一期として出版する、俳諧部門に於ては芭蕉の作品及び之に關聯するものを輯めて『芭蕉全集』として、其他の人々のものは元祿から文化文政ごろまでの主要なものをひとまとめにして『俳文俳句集』として出す豫定であると申されて、編入書目の下タ書を見せられたのであります。私はそれを拜見して多少の愚見をも申述べ、尙あれもよいでせう、これもおもしろいものですといふ風に、おもひついたまゝの書名を擧げたのでありました。加藤氏から俳諧部門二種編纂方のお話がありましたが、淺學でもあり又公私多端の境遇にあるから到底困難である旨を以て御辭退いたしました。加藤氏お歸りの際も尙再考してくれといふお詞を殘されたのでありますが、私はたゞ儀禮的言辭と輕く考へてゐたのであります。

越て十五年の春日本名著全集出版の廣告や豫約募集の册子が出まして、それには私が俳諧部門の編纂を擔任する事に明記されてをるのであります。加藤氏からは御尊父が重患であるので、看護の爲めに歸鄉してゐるといふ御鄉里からお手紙を頂いたのであります。私も其頃三四の重要な案件解決に沒頭してをりましたの

で、何れ更めて何等かお話のある事としてほつて置いたのでありました。

昭和二年四月加藤氏突如長逝されました後、興文社から編輯の方がお見へになりまして、編纂事務速進に就てのお話があつたのでありましたが、上記の次第でありますので、さらば更めて引受けよとのお詞であります。私も少し健康を損ねても居り、多忙を加へて參りましたから、大に躊躇いたしたのでありますが、事茲に至つては如何ともいたしがたい事情にもあるので、敢て微力をつくす事に相成つたのであります。

以上が私の本書編纂をお引受けするまでの經緯であります。此事業計畫者の加藤氏も、加藤氏を私に紹介された沼波先生も、相前後して共に故人になられました。編纂に從事しながらも一たび之をおもふときは、寂寥の感轉々深きものがあります。

二　編入俳書の整理に就て

私が加藤氏にあれもよいでせう、これもおもしろいものですと申しました書目と、加藤氏が豫定されてゐたものとでは、俳書の部數は相當多くなるのであります。最初の考へでは、年代順に代表的俳人の作品集即家集類を編次しまして、其あひだ〳〵に撰集類をはさんで、或時代の横斷を示すやうにしたいとおもつたのであります。

お引受けをして一册の豫定頁數などを承知しましてから、『俳文俳句集』編入書目として發表いたしてありますと四十八部に就て計算してみますに、到底一册には收まりません。之を二册にするときは體系上も都合がよろしいのでありますから、增册の事を興文社へお謀りしたのですが、既に他の部門に於て增册したものも

あり、又毎册殆んど豫定頁數を五六割も超過してをる次第であるから、採算上の齟齬少なからずである。勿論此全集刊行は名著保存の大精神に出發した事業であるゆへ、强ち採算にのみ拘泥するわけではないが、豫約者に對する關係もある事であるから、增頁は止むを得ないが、增册は免してもらひたいとの事でありました。私としては此上押して增册を迫るわけにも參りませんので、增頁を以て適當なる編纂を進めねばなりません。

玆に於て尙一度編入書目の研究をいたしました。其結果横斷面を示す意味の撰句類と連句のみのものを整理いたし、其他のものに於ても多少の加除をいたしまして、豫定四十八部のうち五部を『芭蕉全集』に移し、二十部を割愛いたし、其代りに新たに十一部を加へたのであります。卽ち豫定の四十八部に對して差引九部の減少を見たのであります。かくして各時代の代表的俳書を體系的に編次いたしまして、以て本全集の趣旨に副ふこととといたした次第であります。

三　代表的俳人の見方

各時代に於ける代表的俳人を選み出すに就きましては、それ〴〵の見解があらうとぞんじます。私が此編纂に就て考へましたのは、各時代の有力なる位置を占め、當時の俳壇に何等かの寄與を爲した所の俳人、又は獨自の地歩を占めて光輝ある作品を留めた所の俳人を選ぶ事が、本書編纂の目的に副ふものであるとぞんじたのであります。

此見地よりして元祿期に於きましては鬼貫素堂其角嵐雪去來丈草許六を選んだのであります。元祿期は申

すまでもなく芭蕉の「心の俳諧」創造の時でありまして、其門下は多士濟々であります。又芭蕉と前後して芭蕉とは別派な新風を鼓吹した俳人も少くないのであります。其うちから鬼貫と素堂との二人のみでは少々物足らぬ感が無いでもありまん。が、言水來山信德沾德の徒は新風を鼓吹したとは申せ、まだ全く遊戯氣分を蟬脫し得ないのでありますから、鬼貫素堂の二人に止めたのであります。

芭蕉門下は其十哲をはじめとして雄を一方に示すものは中〳〵多いのであります。俳諧普及に與つて力あるもの、又は門下養成に努めたものなど除外するに忍びないものもあります。現代に於ても其俳統を繼承して何々門の第幾世など稱してをる次第でありますが、前述の方針によりまして其角嵐雪去來丈草許六の五人だけを採つて他は割愛いたしたのであります。尤も三四のものは其編著を『芭蕉全集』のうちに採錄する事にいたしました。

享保期と申すは正しい區劃でもありませんが、元祿期から天明期に至る中間の潰崩時代を指すのでありまして、假りにかく名づけたのであります。此期間は普及と共に低下した時であります。下れば止るのでありまして、やがて天明期の復興を見んとする氣運は享保の末年『五色墨』の頃から動きつゝあつたのであります。此時代の代表として寥和也有千代尼の三人を擧げました。

一口に天明の復興と申してをりますが天明は其絶頂でありまして、事實は寶曆の下半頃から其形を現はし來つたのであります。が、通說に隨つて天明期と呼ぶことにいたしませう。此時代に於ては比較的多數の俳人を推薦いたしました。卽ち太祇召波樗良蕪村蓼太几董青蘿白雄曉臺闌更の十人であります。尙麥水の如き嘯山の如き馬光の如き柳居の如きものもありますが除外いたしました。

文化期の名の下に前は寛政享和、後は文政時代を包含する事にいたしませう。此時代はもう下り坂でありまして、天明期に於ける氣魄の見るべきものはありませんが、恰も江戸文化の爛熟期でありまして、俳諧亦捨て難きものがあるのであります。依て此時代から大江丸士朗巣兆成美道彦乙二一茶抱一の八人を選びました。此八人に比べまして取て遜色の無い人々もあるのでありますが、各方面の代表者として此八人で事足るものと考へたのであります。

俳書の撰擇に就ては各解題の下に記す事にいたします。編次の順序は俳書出版の年次にはよりませんで、各編著者の歿時の順序による事にいたしました。

此代表的俳人并に其編著の撰擇に就ては、伊藤松宇先生をはじめとして先輩友人各位の多大なる御指示を得ました事を明記して、謹で感謝の意を表します。

解說

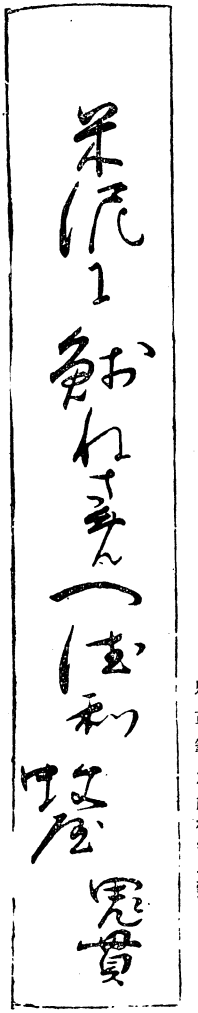
贊川他石

ひとり言　半紙本　二冊

鬼貫句選　同　二冊

七車　同　二冊

芭蕉とは別の途を歩みながら、芭蕉と同じく「誠の俳諧」を唱へたのは伊丹の鬼貫であります。鬼貫は寛文元年四月四日に伊丹の酒造家上島宗次の三男として生れたのであります。『在岡逸士傳』に「天性聰穎而從兒童之時讀書嗜俳諧才富風月」とあります。八才のとき發句を詠んだ逸話があります。其追善集なる『月の月』梅水堂可臥の序文中に「都にあそびては維舟を師とし難波にいでゝは宗因を友とす」とありますので、其俳諧の師友關係を知る事が出來ます。元來伊丹の地は古くから開けた土地で、近衞家の領分でありまして、年貢には年々清酒三千七百五十樽を納める例であつたさうであります。牡丹花肖柏の隱栖した所でありまし。資產家有閑階級の多い所にはあらゆる藝能が盛行いたします。伊丹に於ては俳諧が茶湯や謠曲と同しやうに且那樣達の嗜みとして修業されたのでありませう。宗且鷺助百丸蟻道月尋青人など皆鬼貫の先輩若くは



鬼貫筆（伊藤松宇氏藏）

同輩であつたのであります。此遊戯的雰圍氣の中から「まことの外に俳諧なし」と看破したのは鬼貫の偉なる所であります。

鬼貫は二十七歳の時筑後三池の立花侯に出仕しました。三十人扶持を頂いたと申しますから士分であつたのでせう。が、二年にしてやめました。次で元祿四年三十一の時大和郡山の本多侯に仕へましたが、五年にしてやめ、しばらく京のあたりに住んでゐて、のちに大阪へ引移りました。越前の大野藩に仕へたのは多分この京阪放浪時代であ

鬼貫像

つたのでありませう。大阪に住んでからも二三ケ所引越したのでしたが、晩年は鰻谷に居りまして元文三年八月二日そこで歿しました。享年七十八であります。遺骸は伊丹の願楽寺に納めたのでありますが、鬼貫の墓石はありません。一子永太郎の墓石の右側面に「仙林即翁居士」の法號が刻してあるばかりであります。

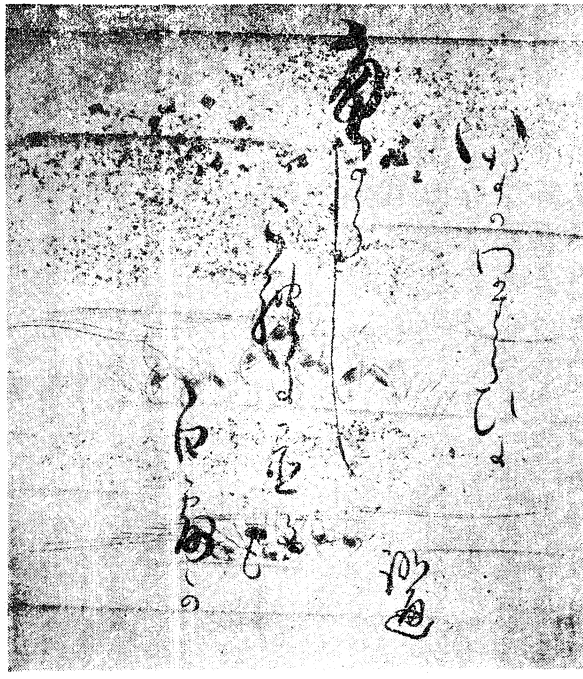
鬼貫は導引をよくいたしました。此法は長崎へ亡命して來た明人某が傳へたもので、鬼貫は紀州の人道古から學んだのであります。『七車』に「大久保道古」の名が見へ、又來山の『續今宮草』「寺嶋の記」の中に「爰に醫あり其妙術は京の鬼貫傳授せしを我よく知れり」とあります。只今でも導引家は其流祖として年々鬼貫忌を營んでをるといふ事であります。諸藩へ仕へたのは或は此術を以てしたのではあるまいかとおもはれます。

來山筆（伊藤松宇氏藏）

鬼貫の至孝でありました事は「禁足之旅記」によつてもうなづかるゝのであります。其貧にせまつて娘を賣らんとしたといふお話は『蕉門頭陀物語』などの記す所でありますが、これは路通を芭蕉の僞筆製造者として惡人視するための作説と見るのが適當であります。幻住庵に芭蕉を訪うて連句をし、「むら紅葉」の次韻に苦んだとか、江戸に下つて嵐雪と兩吟したとか申す事は、皆「禁足之旅記」の誤讀から生じたものであります。

鬼貫は七十三歳ではじめて薙髪して卽翁と號したのでありますから、それまでは浪人姿で導引術の先生であつたのでありませう。導引は按摩上下五百文と大道を流してあるく類のものとは大に異なつて、立派な一の醫術であつたと見へます。

鬼貫の編著は相當多數に上りますが、其情懷を見るべきものは『ひとり言』であります。年頃おもひよりたる事どもを寐覺〳〵に書き付けたものであります。序文を書いた有賀長伯は歌人



路通筆

伊藤松宇氏藏

で鬼貫と同庚であります。其家は代々國學者を出してをります。跋を書いた巨妙子は紫野大德寺塔中淸源庵の大心義統和尙であります。其六十を賀した句が『鬼貫句選』卷之一にあります。『ひとり言』は門人の千及市貢二人の切望によつて開板したのでありまして、享保三年に京の華文軒から出したのであります。

享保十二年鬼貫自ら其句と文とを編輯して『七車』と題したものがありましたが、生前上梓を見ませんでした。其稿本から不夜庵太祇が適宜抄錄して『鬼貫句選』と題して明和六年に公刊いたしました。のち天明三年に至つて大阪の書肆興文堂が、鬼貫の門人只川の後裔であるといふ緣故から、稿本『七車』の所藏者荒木氏と謀つて、既に太祇の抄錄したものを除いて、發句を上卷文章を下卷に收めて刊行いたしましたのが卽ち板本の『七車』であります。卽ち『鬼貫句選』『七車』の二書を併せて鬼貫自選の『七車』に當るのであります。

此三書で鬼貫の面目は露呈するものと信じます。

○

とく〳〵の句合　半紙本　二冊

西行法師の『御裳濯川歌合』に倣ひまして、自らの發句を左右に合はせて、自ら批評したものが素堂の『とく〳〵の句合』であります。素堂は甲斐の敎來石の人、山口氏官兵衞と稱しました。鄕に在る時蓬澤の水利に功があつたと申すことで、そこには「山口靈神」として祀られてあると申します。所謂「生祠」であります。和漢の學に通じ最も詩賦に長じてをりました。連俳は季吟門で芭蕉の先輩であります。茶道に詳しく琴をよくしたといふ事であります。いつ頃江戸に出たか判然いたしませんが、一時東叡山下に住しまして詩社を結

んで蓮社と稱しました。晩年は葛飾の阿武に住んでをりました。芭蕉が小名木川の五本松といふ所に舟遊びして「川上と此川下や月の友」と詠じましたのは長友素堂を思ふての吟懷であります。素堂は俳諧は餘技と見へまして、其作句も多くないのであります。單行の句集と申すものもありませんから、此句合を採錄いたしました次第であります。自撰自評と申す所に、素堂の見解を知るべきよすがが多いわけであります。附載の「俳聯五十韻」は素堂の漢字驅使の巧妙を見るべきものであります。其第一首の第二句「火難」の二字は松宇文庫本には削り去つてあるのであります。素堂が江戸でたび〳〵火難に遭ひましたのを忌んで削去つたのであります。即ち出版後に於て手を加へたのであります。本書には竹冷文庫本によつて補つて置きました。

素堂は初め信章のちに來雪と號しました。其俳統は葛飾正風其日庵と稱して只今は多分其十二世でありよ

素堂像

せう。茶道は宗遍流で、宗旦の今日庵を稱しました。素堂は寛永十九年五月五日を以て甲斐に生れ、享保元年八月十五日江戸に歿しました。享年七十五であります。谷中の感應寺に葬りました。

○

五元集　大本　二冊

同拾遺　同　一冊

「兩の手に桃と櫻」と芭蕉に愛されました其一人の其角は、蕉門第一高足として當時からも後代からも推重されたのであります。其角は寛文元年江戸の日本橋堀江町に生れまして、十四歳芭蕉の門に入りて俳諧を學び、二十歳『桃青門人二十歌仙』や『次韻』の作者に加はりなどして、寶永四年二月三十日四十七歳で歿しますまで、闊達にしてしかも巧緻な才華を縱横に發揮したのであります。左に其編著を年代順に列擧しまして以て彼其角の業績の一斑を示しませう。

延寶八年　田舍の句合　一冊
天和三年　虚栗　二冊
同　年　馬蹄(ひづめ)二百句　一冊
貞享元年　蠶集　一冊
同　三年　初懐紙　一冊
同　年　新山家　一冊

同　四年　續虚栗　二冊
元祿三年　新三百韻　一冊
同　年　いつを昔　一冊
同　年　花　摘　二冊
同　年　たれが家　一冊
同　四年　雜談集　二冊
同　六年　萩の露　一冊
同　七年　歳旦帖　一冊
同　年　句兄弟　三冊
同　八年　枯尾花　二冊
同　九年　若葉合　一冊
同　十年　末若葉（うら）　二冊
同　年　俳諧錦繡緞　二冊
同　十三年　三上吟　一冊
同　年　焦尾琴　三冊
寶永四年　類柑子　三冊

右のうち『虚栗』と『枯尾花』の二書は之を『芭蕉全集』に編入する事になつてをります。『焦尾琴』は其角が類

其角像

燒に遭つて詠草など全部烏有に歸しましたので從來の發句連句の、後世に傳へるに足りると考へましたものだけを編輯上梓しましたものでありますから、其角作品の代表的編著と見てよろしいのであります。『類柑子』は其角の隨筆的雜著でありまして、其編纂の半ばに其角が歿しましたので、嵐雪等が庵中の反古どもを整理したものゝ上に、晉子終焉記及び其追悼の發句連句を附け加へまして、篁影堂に沾洲菊后亭秋色阿桑門青流(青流は後の敬雨又祇空)の三人によつて上梓されたものであります。

其句集『五元集』は其角が自ら撰み自ら書いて板にするばかりにいたしました所の稿本が、芝神明の社僧某の家に秘藏されてゐましたのを、百萬坊旨原が讓り受けまして、其謄寫を蕪村(江戸漂遊中の)に托しました。蕪村は之を引受けながら果たさなかつたので、旨原は更に之を龜成に行らせたのであります。これが『五元集』出版の經緯であります。

其角筆(伊藤松宇氏藏)

『五元集』は元亨利貞の四册になつてをりますが、元亨二册が其角自撰のもの利の卷は「おのがね雜合」と申す闘雞に關した句合でありまして『類柑子』下卷に收めたものゝ續稿であります。貞の卷は拾遺として旨原が

諸書から蒐集したものであります。ですから其角句集としての『五元集』は元亨の二冊と貞の一冊（拾遺）で足りるのであります。外に豐島由誓編の『五元集脱漏』と題するものが竹冷文庫に藏されてをりますが、寫本でありますから省きました。

其角は町醫竹下東順の子でありますが母方の榎本氏を名乘りました。又寶井とも稱しました。寶晉齋晉子狂雷堂狂而堂雷柱子螺舍螺子蕚子涉川などの諸號がありました。墓は芝二本榎の上行寺にあります。只今は二月に三十日がありませんから、一ト月おくれの三月三十日を其角忌といたしてをります。其俳系は晉派と呼ばれ、其宗家は其角堂と稱して只今は第九世田邊永湖氏が庵主であります。

○

玄峰集

半紙本　二冊

嵐雪像

「桃櫻」の一人たる嵐雪は服部氏、幼名は久米之助、はじめ嵐亭治助（はるすけ）と號しまして『桃青門人二十歌仙』作者の一人であります。雪中庵玄峰堂寒蓼堂不白軒などの號があります。其角と同じ寶永四年の、二百餘日あとの十月十三日に歿しました。享年五十四。駒込常檢寺に葬りました。大正八年常檢寺は小石川雜司ケ谷の本敎寺（共に日蓮宗）に合併いたしましたので、嵐雪の墓をも同寺へ引移す事に立至りまして、其第十一世なる現雪中庵主清水東枝氏によつて莊重なる改葬式が行はれたのであります。

嵐雪は官仕の關係等で江戸に居らなかつた事もありまして、其角ほどの活躍はいたしませんが、ぢり〳〵〳〵と踏み固めて行くといふ風でありました。其俳人生活にはいりましてからの樣子は、寥和の記述（『風の末』序）に明らかでありますから、左に抄記いたしませう。

抑居士市中に出るの根本は、石町二丁目也。向ひに神叔軒並びに氷花、百里も遠からず。又隣家にありける望月氏野也は、はせを翁の肉親なれば、なを〳〵翁の往來も近く、（中略）しかるに元祿寅（十一年）八月の燒亡にみなちり〳〵にして、居士は神田やしろの北隣の奥深く窪かなる所に移り、其後彼濱町の邊にあやしの葭垣結廻し、（中略）小ぐらき持佛を朝夕に明て、達磨の尻目を尊み、木魚こち〳〵と淋しく、うらの小窓の前は名さへ物凄き山伏井戸といへるあたりへ通る細道にして、人のゆきゝ　たま〳〵也。

嵐雪の編著は『其袋』があります。立派なものであります。『芭蕉全集』編入の豫定であります。『若菜』は芭蕉一周忌の追善集であります。『杜撰集』『其濱木綿』なども亦捨て難いものであります。其句集『玄峰集』は『五元集』の上梓者である旨原の編纂校訂する所で、板元も亦同じ日本橋區通三丁目の竹川藤兵衞であります。

此書の板木は只今淺草の淺倉の手に保存されてをりまして、『風雪句集』の書名で刷り出されたものも折々見懸けるのであります。

○

去來發句集　半紙本　一冊

丈草發句集　半紙本　一冊

共に蝶夢法師が諸書から拾ひあつめて編輯したものでありまして、はじめは去來のを上卷丈草のを下卷として『去來丈草發句集』の名で安永三年に出したのでありますが、後には

蝶夢筆（伊藤松宇氏藏）

蝶夢像

別々の單行本として發售いたしたのであります。

去來は向井氏、通稱は元淵名は兼時、號は義焉子、儒醫靈蘭先生の第二子でありまして、八歳の時父に從つて京に移つたのであります。兄に向震軒（醫官益壽院法印、元端仁焉子と號す）次弟に魯町（元成禮焉子と號しまして長崎聖堂の祭酒であります）妹に千子（『伊勢紀行』作者）一族に京の風國長崎の卯七などがあります。又其妻可南も俳諧をいたしたのであります。

丈草は尾張藩侯の世臣犬山城主成瀬隼人正の家臣でありまして、内藤林右衞門の子であります。幼名を林之助と申しまして、成瀬家公子（庶腹で、其母は丈草の叔母であります。卽ち公子とは血緣上從兄弟に當るのであります）の扈從でありました。其公子が歿しましたのと、實母に死別したなどの事情から、元祿元年病氣の故を以て遁世したのであります。芭蕉との關係は元祿二年京の史邦（中村春庵と申す醫者で、曾て同じく成瀬家公子に仕へてをつたが、犬山を去つて此時は京にゐたのであります）の紹介で相見入門したので、爾來專念俳道に進みて、芭蕉をして「此僧此道にすゝみ學ばゞ人の上にたゝんこと月をこゆべからず」（丈草誄）と嘆稱せしめたのであります。丈草は犬山に在ゐ頃穗積某に漢籍を、先聖寺（黃檗宗）の玉堂和尙に禪を學びました。漢詩が得意であつたやうにも見受けられます。義仲寺の裏山なる龍が岡（所の人は岡の堂と申します）に小庵を結び佛幻庵と號しました。蒲柳の質でもあり又逃避的氣分から交友範圍は狹かつたのでありますが、去來とは情誼甚だ深いものがあつたのであります。寶永元年二月二十四日佛幻庵に於て歿しました。享年四十三であります。四十二說四十四說四十五說がありますが、私は門人遠藤重成の輓詩「澹泊翁生四十三」の一句によりました。佛幻庵の隣の丘の上に葬りました。二尺ばかりの自然石に「丈草墓」と彫つた

ものが、只今も正秀の墓などと共に淋しく立つてをるのであります。

大正十二年野田別天樓氏は蝶夢編の發句集を以て足れりとせずして、弘く諸書や眞蹟をあさりまして、發句文章書簡を蒐集して『丈草集』を發刊されました。更に市橋鐸氏（犬山出身の人）は該博周到な搜査と研究とを重ねまして、丈草傳の眞相を明らかにし、且又其作品は發句連句文章書簡及び漢詩までを編輯して、完美せる丈草全集を出さんとするよしであります。

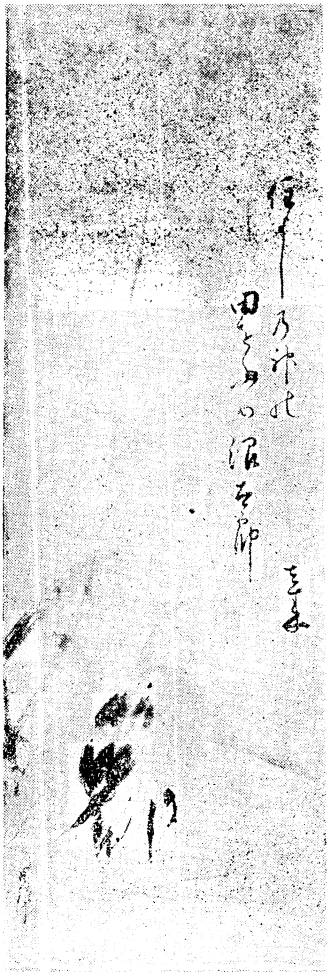
かくしてはじめて丈草の全面目を見る事を得られるのであります。

丈　草　像

去來が芭蕉に從つたのは貞享元年でありませう。去來の蕉門に重きを爲したのは元祿四年の『猿蓑』撰集であります。此書は凡兆と共撰の名になつてをりますが、殆んど芭蕉の删正を經て出來上つたのであらうと推量されるのであります。此書は『芭蕉七部集』の一でありまして蕉風研究には缺くべからざるものであります。『芭蕉全集』へ編入いたします。元祿七年芭蕉送葬の後其角は去來の落柿舍に滯在しまして、互ひに芭蕉の追憶の切情を抱いていろ〳〵話し合つたのであります。其筆記稿本を後年『去來抄』の名によつて曉臺が上梓いたしました。『猿蓑』撰集當時の狀況もわか

去來像

り、又芭蕉の俳諧に關する意見の一片も窺はれるものでありますから、『芭蕉全集』に編入する豫定であります。（尙此書と『柿苔問答』とに就て語るべき事がありますが、それは『芭蕉全集』解題に讓ります）許六の『篇突』に就て、長崎滯在中そこの人々の疑問に答へた筆記がありましたのを、寶曆十一年蓼太指導の下に江戸の桃鏡が『去來湖東問答』の名で、安永七年重厚のすゝめによりて肥後植木の湖桂が『旅寐論』の名で出版いたしました。一讀すべきものであります。



去來墓

去來は文武の諸藝能に達してをりました。其修業は故鄕の長崎方面に於て爲したかに想察されます。京に於て兄益壽院法印の家事を助けたり、又聖護院宮家に勤仕したりいたしたのであります。林鴻の『誹諧京

羽二重』によりますれば中長者町堀川東入に住んでゐたやうでありますが、晩年には各務支考の「落柿舍先生挽歌」に「家は望護院の森にかくれて、寒き梟の聲に驚き」とある如く、洛東に居つたのであります。嵯峨の落柿舍は折々游息の所でありまして、芭蕉の『嵯峨日記』によつて特に名高くなりました。（只今の落柿舍は三度目のもので、場所も全然違つてをるのであります）

去來は丈草の歿した寶永元年の九月十日に享年五十四で歿しました。洛東鈴聲山眞如堂先塋の次に葬りました。其後向井家の墓域は移轉した事もあつたかのやうで、只今の墓域内に去來の墓碣は見えません。寺の過去帳にも記載が無いさうであります。只今の落柿舍のうしろの藪の中に一區の墓域がありまして、其入口の片隅に一尺五寸ほどの自然石に「去來墓」と彫つたものが立つてをりますが、無論埋骨の所ではないのであります。こゝは涌蓮法師の墓を中心とした一墓域であります。

去來作品集の完全なものは顯原退藏氏によつて公刊されるやうに仄聞してをります。玆に於て蝶夢編の兩發句集の缺陷が補正されるのであります。

○

風俗文選　大本三冊

俳諧の心を以て書いたものが卽ち俳諧文であると芭蕉は申しました。漢文系でも國文系でもない一種の文體を創始しました芭蕉の偉大な事は今更申すまでもありません。西鶴の文章なども俳文として見る事が出來ませうが、正しい俳文は芭蕉及其一派のものに限られる感があります。後の之に倣ふものも少なくないので

ありますが、飄逸奇警は在つても典雅清新に乏しいのであります。芭蕉及其一派の文章を集めて大成したものが許六の此『風俗文選』であります。此編輯に就ては李由去來支考などが大に援助したのでありまして、芭蕉一門の優秀なる文章は殆んど網羅してをるのであります。此書はじめは『本朝文選』と題したのでありましたが、世外のものゝ文章を集めたものに「本朝」の文字は憚るべしとして今の如く改めたのであります。又はじめは路通の「返唐文」を編入してあつたのでありますが、作者列傳中路通の條に「其性輕薄不實而長違師

許六筆（伊藤松宇氏藏）

許六像

命」と書きました事に就て物議を生じまして遂に「返店文」を削り去つたのであります。其他多少改訂を加へた部分もありまして、精密に申しますれば此書は初板以來數種を生じたのでありますが、大體「本朝」の名を冠し且つ「返店文」を含む初板のものと、書名を『風俗文選』と改め、且つ「返店文」を含まないものとの二種と見てよろしいのであります。本集には「風俗」の名のものを編入しまして、「返店文」だけは特に挿入して置きました。おもふに許六は編輯には其衡に當り自己の意見のやうに運んだのでありましたが、出板等の事は一切之を書肆に一任してしまつたのでありませう。本書を通讀いたしますに、漢字に濁點を付けるなど不自然な事をいたしてあります。改題や路通の文章削除なども主として書肆の策動であつたかも知れません。

許六は彦根藩士三百石の知行取りでありまして、森川氏、名は百仲字は羽官、五老井菊阿佛などの號があ

「本朝文選」の裏紙

ります。元祿五年の秋江戸ではじめて芭蕉に相見したのでありますが、其前々から蕉門の諸俳書に親しんでゐたので、初對面とは申しながら芭蕉の琴線に觸れるものがあつたのであります。正德五年八月二十五日六十歳を以て歿しました。其編者は此書の外に數種ありまして皆一讀に値ひするものであります。就中『韻塞』は佳書でありますから之を『芭蕉全集』に編入する豫定になつてをります。許六は繪をよくいたしまして、芭蕉は「畫はとつて予が師とし、風雅はをしへて予が弟子となす」と其別離詞に記してをります。對句の關係上少し誇張した文字になつたのでありますが、許六の畫の平凡でなかつた事が首肯されるのであります。

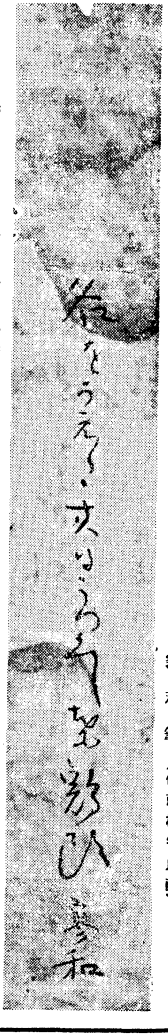
○

誹諧職人盡前集	半紙本	一冊
同　後集	同	一冊

甘露寺親長卿の作と傳へられます所の『七拾壹番歌合』といふ書があります。百四十二種類の人物を左右に番ひ、其人物に因んだ月と戀の歌を合はせたものであります。其人物と挿畫（土佐刑部大輔光信朝臣畫）を其まゝ用ひゝ之に因める古今の發句を配しましたものが『誹諧職人盡』前後の二集でありまして、寥和の編する所、前集は延享二年仲夏の上梓、後集は四年後の寛延二年の出版であります。俳書としては特種に屬するものでありますが、本集の内容を多趣ならしめる點に於て、又享保期の一俳書を採錄する點に於て敢て編入したのであります。

編者の寥和は大場氏仁左衞門森茂と稱して江戸の人であります。はじめは柳隣咫尺と號しまして『五色墨』の一人であります。『五色墨』と申しますのは、芭蕉歿後寛永正德享保と年を經るに隨ひまして、蕉門の高弟

もだん〳〵減つてまゐり、俳諧の水準はます〳〵低下して行くのでありまして、中には謎やらしやれやらわからないものもあるのであります。此等の墮落を一洗して新風を鼓吹せんといたしましたのは、白兎園宗瑞樽巷郎蓮之（後に珪琳、其角の句と誤り傳へられる所の「梅が香や隣は荻生惣右衞門」の句の作者（柳隣咫尺絢堂素丸（後に馬光）鷗心亭長水（後に柳居）の五人でありまして、共に相謀つて一人を判者として除き、他の四人が一卷の連句を賦して其判者の批判を受ける事とし、交互に之を行ひまして五通りの批點ある五卷の



蓼和　紙（伊藤松宇氏藏）

蓼和（咫尺）像

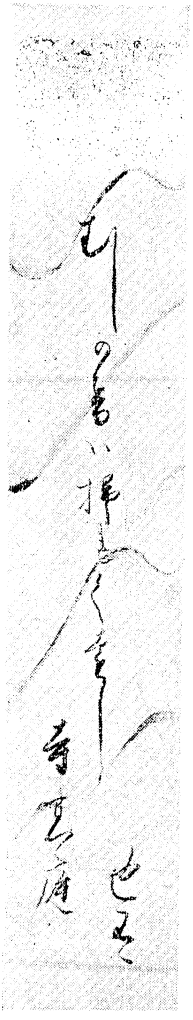
連句を得たのであります。之に竟宴の一卷を加へて上梓いたしましたのが『五色墨』であります。即ち此人々は連句からして革新を試んとしたのであります。前句附の紀逸點や川柳點が人氣を呼び、三笠附が遂に賭博類似のものとして禁止命令を受ける始末でありまして、芭蕉が最も力を入れた連句が甚しい墮落をいたしたのであります。享保十六年に於て此連句革新に着眼しました『五色墨』の人々は俳諧史上閑却すべきでありません。其一人たる寥和の編著を採錄した微意亦茲にあるのであります。

寥和は寶曆九年十月二十九日八十三の高齡を以て歿し、淺草誓願寺中林宗院に葬りました。咫尺齋規矩庵萬里亭茶酒隣などの別號があります其俳系は寥和を第一世として代々咫尺齋寥和と稱しまして、雪門の別働隊として武藏を中心に勢圏を張つてをります。只今は多分第九世であらうとぞんじます。

「五色墨」の表紙

うづら衣正篇　半紙本　三冊
同　後篇　同　三冊
同　續篇　同　三冊
同　拾遺　同　三冊

正篇は上下續の三册にて天明五年、後篇は上下鏡裏梅の三册にて年次不明、共に堀田六林の校訂によりて蔦屋重三郎の板であります。續篇上中下三册、拾遺上中下三册共に垂穂の編で、續編は文政六年拾遺は其後



也有筆（伊藤松宇氏蔵）

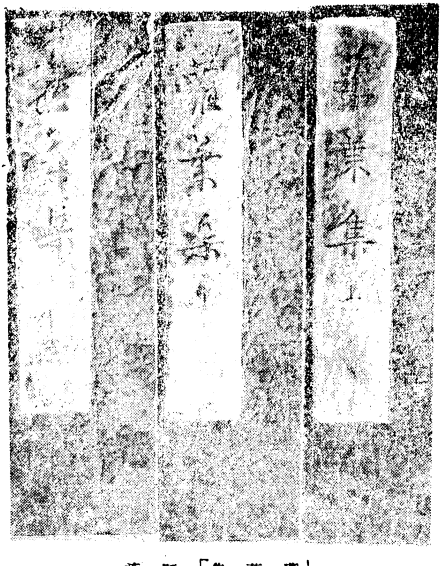
（年次不明）の出板でありますが、後天保十二年に大阪の塩屋忠兵衛が全部をまとめて四册にして再刷したものが只今一般に普及してゐるものであります。本書は松宇文庫青印本初刷に係る十二册の善本によつて校訂いたしましたが、拾遺の下卷にある五月雨の歌仙一卷はわざと省きました。

蜀山人が「借物の辨」の一文を讀んで激賞措かず、人を介して六林の藏せる所の『うづら衣』稿本を求め得て上梓したと申す一事で、此書の價値は定まつたのであります。狂歌の盛行しました蜀山人の時代に於て、輕妙奇警の也有の文章が喜ばれましたのに不思議はありません。之を蕉風俳文の標準よりして見まするときは或は俳文ではないかと考へらるゝ人もありませう。さりとて俳文ではないと斷ずるわけにもまゐりません。畢竟也有式俳文と申す外はないのであります。

作者の也有は名古屋藩の重臣でありまして、千五百石の知行取でありました。横井孫右衞門時敏が公の民名で、俳諧には也有（はじめ野有、祖父野双の一字を取つたのでありませう。野双は季吟門で名古屋俳諧の原始期に屬する人であります）狂歌には蝶丸、歌には暮水、詩には北並明（横井氏は伊豆北條氏の系統に屬するといふので「北」の字を冠したのださうであります）など〻稱し、半掃

也有像

庵知雨亭蘿隱等の別號がありました。也有は多能の人でありまして、武家としての表藝たる射騎劍槍の四道は申すまでもなく畵をよくし、亂舞や琵琶なども堂奥に達してをりました。漢學は小田伺齋に學びましたが俳諧の師は誰であつたか不明であります。或は美濃派の太田巴靜あたりと師友關係があつたのではないかとおもはれます。也有の發句は美濃派の色彩が濃厚であります。天明三年六月十六日歿しました。享年八十二であります。其知行所海部郡八開村藤瀨の西音寺に葬りました。詩集を『蘿隱篇』歌集を『蘿窓集』發句集を『蘿葉集』狂歌集を『行々子』と題していづれも也有の自撰であります。『蘿著集』は也有存生中の明和三年に上梓いたしました。のち明和七年家僕で且つ門人である所の石原文樵が蘿葉後集とし『蟻づか』三册を公刊いたしました。其附錄『我洋篇』は也有と六林との漢和及和漢連句五卷であります。是亦也有の行くとして可ならざるなき才藻を見るべきものであります。が、也有の面目は『うづら衣』によつてことゞく露呈するのであります。

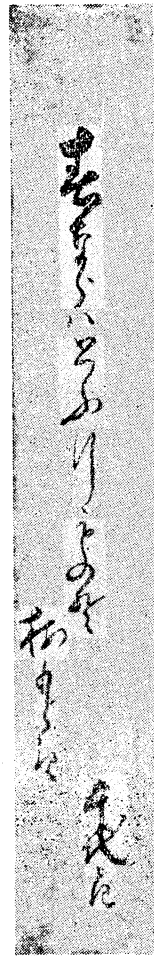


蘿葉集」題簽

○

千代尼句集　半紙本　二冊

安永四年九月八日に七十四(又は七十五)で歿しました千代尼は、其晩年には所謂中興諸大家に接觸したのでありますが、加賀の松任に生れて希因や支考や乙由や蘆元坊などから受けた感化で、支麥之徒の俳風に固まつてしまつて、諸大家からは何の影響をも受けなかつたのであります。私は曾て本居派のある歌人から千代尼の句を激賞したお話を仕向けられて、御挨拶に苦しんだ事があります。俳諧



千代尼筆（伊藤松宇氏藏）

千代尼像

は滑稽也と申す見地から、又は『古今集』等の俳諧歌の標準から申しますときは、貞門の句風が正系で、蕉門の人々は皆異端者なのであります。ある歌人が千代尼の句をお譽めになるのも怪しむに足らないのであります。

女流俳人として、元祿時代から千代尼の頃までのものを列擧いたしますれば、捨女美濃女智月尼羽紅尼梢風尼秋色女園女吉友尼諸九尼などがあります。其中から千代尼一人を選み出して其句集を採錄する事にいたしましたのは、畢竟時代の代表者として選んだのでありまして、女流と否とにかゝはりません。千代尼の句はある歌人の御推賞を蒙つた通り、最も機智巧思に富んでをりまして、美濃派伊勢派(美濃派は支考の俳系、伊勢派は麥林舍乙由の俳系。卽ち支麥之徒と指斥された流派であります)の横行した享保時代を代表し得るからであります。其句の多くが人口に膾炙してをりまして、千代女の名は一般民衆に親しみがあるのであります。此點から見ますれば、千代尼は恰も女流俳人代表者の觀がないでもありません。其句集は寶曆十三年無外坊旣白が編纂梓行した『千代尼句集』及び其歿後其續篇として出した『松の聲』があります。本集には『千代尼句集』だけを編入いたしました。

千代尼は松任の表具師增屋六兵衞の娘でありまして、十八歳のとき同所の福田彌八に嫁しました。不幸夫に早く別れましたので、剃髮して素圓と號し、專念俳道に入つたのであります。墓は同所の聖興寺に現存いたしてをります。

○

太祇句選　半紙本　一冊

同後篇　同　一冊

太祇の經歷はあまりよくわかつてをりませんが、江戸の人で「炭」氏であります。「炭」は慶紀逸の「慶」、謝蕪村の「謝」と同じ漢癖の一字氏でありませうが、何氏であるかはわかりません。俳諧ははじめ雲津水國（貴志沾洲門）に學んで水語と號しましたが、紀逸（二世湖十門又は白峰門）に從つて太祇と改めたのであります。不夜庵と稱したのは京の島原に住んでからであります。京へ移つたのは四十前後らしく、それまでの江戸の境涯はさつぱりわからないのであります。京の生活に就ては四時堂其諺が其隨筆『翁草』に記した所でほゞ想像が付きますから、左に引抄いたしませう。

太祇は俳諧も人も和らなり。常に酩酊す。坊主にて、衣類に大なる紋を付る。我にも穴賢紋を付け給へと勸む。役者付き合が好きにて、誰々とも皆懇なり。中にも東武よりの馴染とて、嵐三汐富之助を贔屓す。

太祇は天明復興先驅の一人でありまして、俳諧史上逸すべからざるものであります。嘯山の『太祇句選』序文中「もし趣を得れば、上に置、下になし、あるは中にもつゞりて、一句を五句にも七句にも造りなし、唯意をうるをもてせ（專）とす」と記した句作態度や、几董がその『新雜談集』に記した所の「題ひとつを得て、趣を百に分ちて案ずる時は、百樣の姿情を得るなり、さほど（「の」脫カ）勞煩をなさずしては、さうなき一句の

太祇筆

主にはなりがたし」といへる太祇の詞によつて、その意のある所を窺ひ知らるゝのであります。太祇は江戸座仕込みではありますが、其俗悪卑野の黠は微塵もありません。實によく「アクヌケ」がしてをるのであります。畢竟連句から得た人事趣味的俳句の秀抜なるもので、他の追從摸倣を許さない太祇獨得の持味を示してをるのであります。

太祇は明和八年六月九日に六十三で歿しました。其一周忌に出したのが『太祇句選』であります。其詠草には佳句が多くて選抜に苦んだから、各題下のはじめの數句づゝを手にまかせて引抜いたのであると申します。其七年忌に門人で不夜庵二世となつた五雲が『太祇句選後篇』を出しました。外に三回忌のとき同じ五雲が『石の月』を編しまして、この中に太祇の句三十六句を收めたのでありますが、編入の二書で足りるとおもひまして除外いたしたのであります。

太祇像

○春泥發句集　半紙本　二冊

太祇と殆んど句兄弟の觀があります召波は黒柳氏、春泥舍と號して京の人であります。蕪村門人といふことでありますが、蕪村は門人以上に見てゐたやうであります。召波は安永六年十二月に歿しました。享年不明であります。『春泥發句集』は其歿後直に召波の子の維駒が編輯上梓したものでありまして、其蕪村の序文は味讀すべきものであります。(『蕪村文集』編入のものとは多少文字の相違があります。何れが正しいのか判斷いたしかねるのであります)蕪村の筆蹟を其まゝ板下にしたものでありますから、本集には寫眞版にし

て挿入いたして置きました。

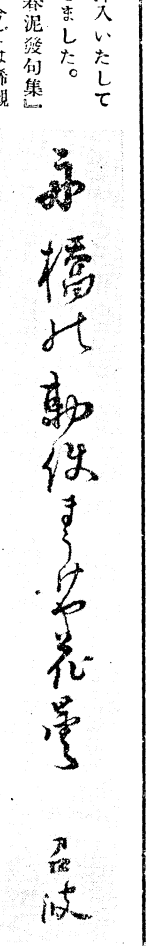
『春泥發句集』は只今では稀覯の書に屬してをりまして、京都の藤井紫影博士と、大阪の水落京二氏との外には其所藏者を知りませんほどであります。本書校訂に際しまして博士は喜んで其秘藏書を貸與せられ又顯原退藏先生は原稿との綿密な引合はせにお當り下された事は、私の深く感謝する所であります。(在彦根の佐野伊藤の二氏を煩はした事に對し亦謝意を表したいとおもひます)

○

樗良發句集　半紙本　一冊

安永二年の秋、京は油小路なる嵐

樗良像



召波筆

山の草扉を叩いた三人の俳士は、病臥の庵主を慰めんと、膝押しの俳諧をはじめ、遂に一夜にして四吟歌仙四巻を得たのでありました。『此ほとり』又『一夜四吟』がそれであります。三人の俳士は即ち樗良蕪村几董であります。樗良の姓氏は不明であります。志州鳥羽の生れで、伊勢の山田に住んでをりましたが、ある時は熊野の「あたしか」といふ所に假の庵を結び、ある時は京の木屋町に錫を挂けて一意俳道に進みまして、中興諸家ことに蕪村一派と深く交はつたのであります。

樗良筆（伊藤松宇氏藏）

其草庵を「無爲」と號しました通り、彼は恬澹無爲の生活を樂しんだのでありまして、發句なども其詠草を留めなかつたのであります。門人玄化が句集編むべき志があつて、懇請して漸く百句を書付けてもらつたのでありましたが、果さずして玄化も樗良も歿してしまひました。玄化の弟甫尺深く之を遺憾といたしまして門人達の記憶や反古の中から拾ひ集めて、編纂上梓いたしたのが即ち此『樗良發句集』でありまして、天明四年の出版であります。

樗良は安永九年十一月十六日に歿しました。享年五十二であります。『一夜四吟』の時には彼は四十六、蕪村は五十八、几董は三十三でありまして　庵主の嵐山は其年の九月二十四日歿しましたが、享年は不明であります。

樗良には『樗良三部集』（我庵集、石をあるじ、燕つり）『樗良七部集』（時雨笛、菊の香、佛の座、花七日一日行脚、雪の聲、まだら雁）『樗良文集』などがあります。發句集の後篇は豫告だけで、出版にはならなかつたやうであります。又蘇室久安の編した『八瀬』と題する元治元年出版のものもあるさうでありますが、樗良の句風を見るには此發句集だけで事足りるとおもふのであります。

「八瀬」題簽

○

燕村句集　半紙本　二冊

同　文集　同　二冊

『燕村句集』は燕村の小祥忌追善の意で、高弟高井几董が編輯出版いたしましたもので、燕村の佳什は殆んど之に盡きてをるのであります。明治に至りまして故角田竹冷先生の『燕翁句集拾遺』故大野洒竹氏の『燕村句集後篇』并に故水落露石氏の『燕村遺稿』三種の出版がありまして、燕村の句の量は増したのであります。尙

近年諸家の研究で其追加を見たのでありますが、蕪村の發句としては、此一書で十分であります。

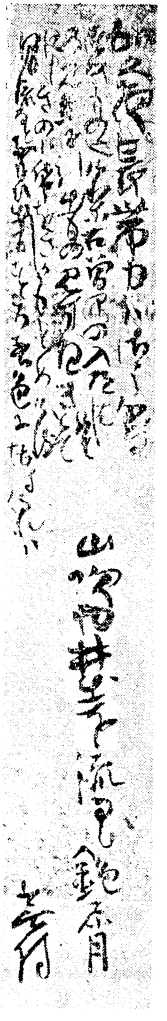
『蕪村文集』は湖東の忍雪と洛の其成とが蒐集編纂いたしましたもので、文化十三年の出版であります。自在にして趣致多き蕪村の文章は、其發句と共に芭蕉とは別な一新境地を拓いたものでありまして、確實に俳壇の一領域を占有し得るのであります。

蕪村の編著は『玉藻集』(少々疑問もあるのですが通說に從ひませう)『芭蕉翁附合集』『寫經社集』『夜半樂』『桃李』『花鳥篇』『新花摘』などであります

蕪村像

す。世に『蕪村七部集』と稱しますものは、前記『桃李』『花鳥篇』の外は、几董編のもの五部維駒のもの一部を含んでをるものでありまして、蕪村はむしろ關係が薄いのであります。然るに之に蕪村の名を冠しましたのは、其盛名を利用せんとする書肆のしわざであります。

蕪村は攝津の天王寺村に生れ、谷口氏でありましたが、母方の緣故で丹後の與謝の海のほとりに少年時代を送りましたので、與謝氏を稱したのであります。俳諧は早野巴人門で、青壯年時代を江戸關東奥州方面に



蕪村筆（伊藤松宇氏藏）

漂遊してをつたのであります。其居を京に定めて宗匠の門戸を張りましたのは明和のはじめ頃であつたらうと考へられます。此時夜半亭第二世となつたのであります。其繪畫は南北二宗の精英を咀嚼して、吐いて蕪村風の新機軸を出したのであります。『俳諧三十六歌僊』は義仲寺翁堂に揭げました蕉門三十六人の肖像に、其句を題したものでありまして、蕪村の創意なりと申す所の極端なる減筆法のよい標本であります。蕪村の俳諧は几董之を受け、其繪畫は吳春之を傳へたのであります。蕪村の芝居好きであつたのは著名の話であり

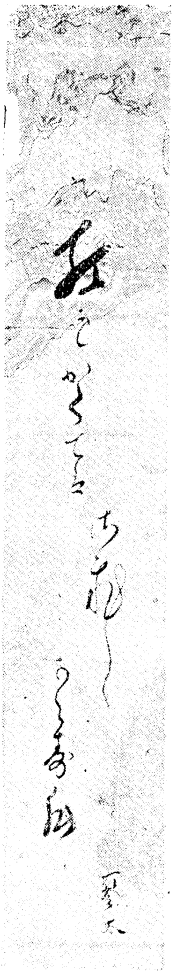
まして、其句にも芝居がゝりのものがあり、又役者に關した句も集中に散見いたします。

蕪村は天明三年十二月二十五日病んで歿しました。享年六十八であります。洛東一乘寺村の金福寺に葬りました。寺は曾て蕪村等が芭蕉庵を再興した所であります。几董の書きました終焉記を『から檜葉』と申しまして、其角の『枯尾花』に匹敵するものとの定説があるのであります。蕪村名は長庚字は春星、のち名を寅と改めました。落日庵紫狐庵三果堂碧雲洞などの號がありました。

○

蓼太句集初篇　半紙本　二冊

享保時代の雜俳的遊戯に倦んじ果てました人々は、申合せたやうに芭蕉を回顧しはじめたのであります。



蓼太筆（伊藤松宇氏藏）

芭蕉を義仲寺に葬つてから寶暦十一年に至る六十八年の間に、全國各地芭蕉の足跡を印したと否とにかゝは

らず、追慕のために築き立てた所の「翁塚」の數が九十六に上つたといふ事實は、雄辯に此回顧の切情を物語るものであります。其次に來るものは俳書の覆刻であります。稿本の公刊であります。作品の註釋であります。中興諸家で此等の仕事に先鞭を着けたものは實に雪中庵蓼太であります。蓼太の出しました『七部捜』は寶曆十一年でありますが、其師更登に疑義を質したのは寛保二年であります。東北地方へ旅行しまして拾ひ集めた芭蕉の連句數卷を『奥の細道拾遺』と題し、渉青の名によつて上梓しましたのは延享元年であります。芭蕉の評言ある不玉の獨吟歌仙を『秋の夜』と題して出したのは同四年であります『續五色墨』の作者の一人となつたのは寶曆元年であります。『雪おろし』を著はして湖十等の『延享二十歌仙』を難じたのも同年であります。同七年には『芭蕉句解』を著はし、

蓼太像

同十三年には『俳諧無門關』を出したのであります。かくの如く蓼太は延享寶曆の頃から芭蕉の紹介と句風の復興に努めたのでありまして、明和に入りましては既に蔚然たる大家でありました。其一代の編著は門人の名を以て出しましたものを加へますれば、やがて二百部に達するのであります。此等のうち眞に彼の技倆を見るべきものとしては『住吉千句』『七栢』『百羽がき』などであります。彼は連句に於て其長技を示してをるのであります。彼の世評は毀譽區々でありまするが、トニカク雪門の基礎を定めて、其餘流今に衰ろへず、俳壇の一勢力を爲してをるのは、彼蓼太の力であらねばなりません。其句集初篇は門人子規亭吐月時雨窓月巢の校訂で明和六年に、其二篇は門人振々亭三略膝堂志寧文來庵雪萬の校訂で天明五年に上梓されました。殁後の寛政五年雪太郎三路纂輯四世雪中庵完來校訂山花人午心淨書で其三篇を出しましたが、蓼太の句風の一斑は初篇だけでわかるのでありますから、二三篇は割愛したのであります。

蓼太は木曾産覺の人、大島氏、名は陽喬であります。空摩居士はなにがしの禪師から與へられましたものです。天明七年九月七日八十歳で殁しました。深川六間堀要津寺に葬りました。要津寺は彼が曾て芭蕉庵を造立した所であります。

○

井華集　半紙本　二冊

天明八年に出ました『井華集』は、几董自らの板下であります。几董が句集を出さうとして、幾たびか稿を改めて『晉明集』を編成しましたが、尙意に滿たないものがありまして、更に此『井華集』を編纂したのであり

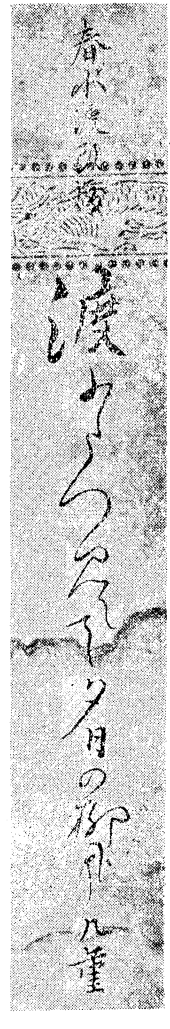
ます、でありますから集中の句々佳ならざるはなしであります。几董のおもむき深い書風の板下に、彫師の腕の冴を見せて、丹表紙の高雅な仕立はいかにも几董の好みらしいものであります。此書只今は稀覯の部に屬してをりますが、幸に松宇文庫の善本をお借りして校訂を了したのであります。

几董は高井氏、几圭の男で、はじめ春夜樓晉明と申しましたが、のち剃髪して詐善居士と名乗りました。蕪村の高弟であります。蕪村が机を立てゝ夜半亭第二世たるべく勸められましたとき「余が師の俳諧を前に繼る几圭か男几董、我門に在て永く先師の教を守らば勸に應ずべし」と答へて、遂に蕪村の希望の如くなつたと申す事であります。此逸話は蕪村が几圭に義理を立てたと考へますよりも、むしろ几董の才藻を深く愛したものと見るのが、正鵠を得た解釋だらうとおもはれます。後年几董が江戸に遊びました時、蓼太は勸めて夜半亭の第

几董像

三世を名乗らしたのも此因縁によるのであります。

几董は其角に私淑してをりまして、其筆蹟を學んだのであります。のみならず其角の『雜談集』に倣つて『新雜談集』を著はしましたが、其内容の編次順序までも强て『雜談集』に似せんとした嫌ひがあるのであります。其編著は此『新雜談集』の外『其雪影』『明烏』『續あけがらす』『一夜四吟』『續四歌仙』『是上の五部は『蕪村七部集』の中のもの)『もゝの雫』『から檜葉』『蕪村句集』『續一夜松』前集、同後集『手びき草』『菊の宿』『遊子行』



几董筆（伊藤松宇氏藏）

『井華集』などの多數に上ります。几董亦連句に長じてをりました。

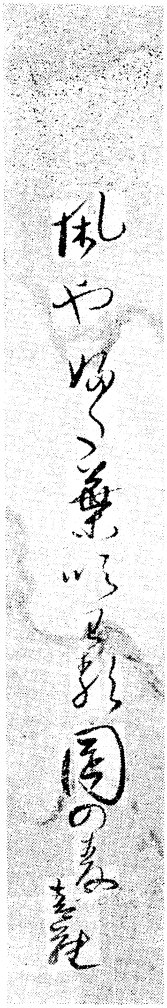
几董は寛政元年十月二十三日門人なる池田の士川が在岡の別墅で頓に歿しました。(腦溢血カ)享年四十九歳であります。門人宮紫曉終焉記を綴つて『鐘筑波』を編しました。

先年故遠藤蓼花氏は几董の草稿十餘册を得ました。不用意に筆を走らせた草按を塗抹改竄した跡はなつかしいものと見たのでありました。蓼花氏は此草稿中から拔萃いたしまして『晉明集』『續晉明集』の二册を公刊

いたしました。

○ 青蘿發句集　半紙本　三冊

寛政の頃二條家で「花本」若くは「大宗匠」の稱號を俳人に與へる新例を開きました。其二年の九月十七日曉臺一門を銅駝御殿にお招きになりまして、左大臣殿の立句で百韻興行がありました。此時が恐らくは二條家が俳諧に干與されました最初でありませう。其翌月の十月十七日には闌更と青蘿が呼ばれましたが、此時は闌更が主であつたのでありませう。其翌年の三月十四日に青蘿は再び銅駝御殿に招かれまして百韻を興行いたしたのであります。『俳諧六家集』青蘿の略傳中に「賜中興宗匠之職服」と嘯山が記してをります所の職服と申すのは、侍烏帽子に布の素袍であつたと傳はつてをるのであります。當時の俳人は之を至大至高の榮譽といい



青蘿筆（伊藤松宇氏藏）

たしたのださうであります。天明期諸大家にして此二條家の俳諧興行をいたしたのは此三人だけであります。

青蘿は酒井侯（厩橋より姫路へ移封）の家臣で江戸定府の松岡門太夫の三男鍋五郎でありまして、同じく江戸定府の武澤喜太夫の養子となりましたが、六歳の時養父が歿したので家督を嗣ぎました。素行が修らないといふので二十歳の寶暦九年に國詰を命ぜられたのでありますが改悛の狀が見えませんで遂に同十二年に永のお暇となりまして姫路を立退いたのであります。そこで剃髪して山李坊令茶と名乘りまして、東西行脚の後明和四年に播州加古川に住みまして專ら俳諧に遊び、栗之本と號しました。東洲和尚に參禪して青蘿の號を與へられましたのは、此頃の事でありませう。安永のはじめ頃伊勢の樗良がおとづれ來て連句七卷を殘しました。（樗良の七週忌に『骨書』の名で三木李雨によつて上梓されました）天明七年青蘿は京に遊びました。『續四歌

青蘿像

仙』及『みやこ六歌仙』によつて其風懐が窺はれるのであります。此時は曉臺臥央闌更などが京に居り合はせたので、几董月溪などの手練者を加へて俳諧は大にはづんだ（てだれ）であります。

寛政三年五月項部に頭癰と申すものが出來、その腫物のために遂に六月十七日に五十二歳を以て歿したのであります。栗之本を刷ぎました淡路の玉屑（肥後の生れで播州米田村神宮寺住僧となりましたがのち淡路に住みました）が追善集を編して『水の月』と題しました。『青蘿發句集』も亦同じく玉屑の編輯でありまして、寛政九年の出版であります。

○

白雄句集　半紙本　二冊

闌屋の巣兆の板下といふ異色を持つた句集一冊、それは春秋庵白雄のものでありまして、其三回忌追福の意味で、門人川村碩布が鈴木道彦建部巣兆等と謀つて編纂上梓したものであります。

白雄筆（伊藤松宇氏蔵）

白雄は信州上田の城主松平伊賀守の小姓（家臣伊藤某の息で鬼藏と稱した由）でありましたが、如何なる仔細がありましたのかは存じませんが、十三歳のとき家出したのだとも申しまして、其俳人しら居坊咋烏として現はれまするまでの徑路はよくわかつてゐないのであります白井烏酔門で、松露庵三世鴨立庵五世など名乘りましたが、のち春秋庵白雄として江戸に關東正風の旗幟を飜したのであります。其句風が示す通りおとなしい寧ろ高踏的な白雄は、中興諸家と角逐するなどと申す野心はなかつたのでありますが、其門下には道彦長翠碩布巣兆冥々葛三天姥保吉雨塘星布女の如き有力なものが集つたのを見ますれば、彼の德望を認めねばなりません。彼の遺稿に『俳諧寂栞』三册があります。俳諧一般に關する心得書でありまして、所謂「傳書」の一種であります。其『春秋稿』は初篇より第五篇までは白雄の編、以下第九篇までは

白雄像

門下の編でありまして、春秋庵社中の隨筆的記錄であります。

白雄は寛政三年九月十三日に歿しました。享年五十七であります。其墓碑は品川海晏寺の門前の叢中に淋しく立つてをりましたが、大正十二年震災後どうなりましたか。其後尋ねないので存否を知りませんが、是非保存して置きたいものであります。

○

曉臺句集　半紙本　二冊

文化六年出版されました『曉臺句集』は門人櫻井臥央の編輯したものであります。寛政六年亭々坊車蓋が編纂した『發句三傑集』(曉臺闌更蓼太)中曉臺の句の間違つてをるものが百七十餘ありますので、臥央は士朗と相談して此句集を出したのであります。

曉臺筆（伊藤松宇氏藏）

曉臺は久村平兵衛と申して名古屋の人であります。蓮阿坊白尼（名古屋の人武藤氏、巴雀の男）の門でありますが、伊勢派の舊染を洗ひ去つて中興新風を諷つたのであります。寛政二年の九月には二條家に召されて百韻を興行し、貞恕以來約九十年中絶してをつた「花本」の稱號を許されたのであります。其俳席の略圖が『古事類苑』文學部十四俳諧下に出てをります。攝家の御館へ地下のものが參上して俳諧をいたします事は、其當時にありましては無上の光榮であつたのであります

曉臺は名古屋大池町一丁目に在つて甚しく荒廢した野崎氏の別業を買ひ求めまして、大に修理を加へて「龍門」と名づけたのであります。其殘後轉々して只今は鈴木莊兵衛氏の有に歸したと聞いてをります。服部悔庵の「龍門園記」といふものがありまして、其文中「園中其東面而敞者曰暮雨。曉臺所居。憑欄馭眼。平疇十里。邨落滃置。八琴猿投諸山。翠黛接空。宜雪。宜月。宜朝

曉臺像

霞。而尤宜於暮雨。屏障貼金。蕪村畫石。欵曰寫似暮雨兄」などゝあります。曉臺が「暮雨巷」と稱した次第はこれによつてわかるのであります。

曉臺は度々京に遊びまして蕪村一派とも親しく交つたのであります。寛政三年十月には京の白山通三條の北に一庵を設けまして、之にも「龍門」と命名したのであります。日頃咽喉の病がありましたが、此年の十一月十日あたりに病疾激しく起り、食道も腫れ塞がるほどの惱みでありまして、遂に翌寛政四年の一月二十日に六十一歳を以て歿しました。京極の南大雲寺に葬りました。門人桃唾の書いた終焉記に追悼の連句發句を取合はせて編輯した一書が卽ち『落梅花』であります。『曉臺七部集』は單行の七種を後人が取合はせたものでありまして、彼の技倆を見るべきものであります。『延寶廿歌仙』(『桃青門人二十歌仙』の事) 覆刻及び『去來抄』の梓行の功は沒すべからざるものでありますが、前のは其底本が不完全であり、後のは「故實篇」を省いてありますので、曉臺の不注意として識者の指斥を甘受せねばならないのであります。

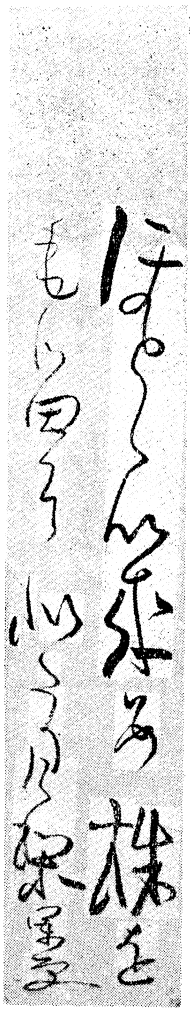
○

半化坊發句集　小本　二冊

曉臺と同じやうに『冬の日』復興を唱道し、曉臺と同じやうに二條家の俳諧に召され、曉臺に次いで「花本」となりました闕更は、加州金澤の人で、高桑氏であります。希因に從つて半化坊と號しました。晩年には京の東山なる双林寺々畔に芭蕉堂を建てゝ芭蕉を祀り、其傍らに小庵を結びました。卽ち南無庵であります。芭蕉堂が只今も無事に保存されてをりますのは、木村素石氏のおかげであると申します。明治の初年此堂の

將さに取拂はれんとしたときに木村氏(當時三井物産重役、明治三十六年一月二十一日六十七にて歿す)が土地建物を買求めて破壞の手から脫したのであります。のち芭蕉堂第七世安達南德氏の時、木村氏から讓受けて社中共有永代退轉せざる方法を立てたのださうであります。

關更は寶曆十三年『花故事』を上梓したのをはじめとして、『落葉考』『俳諧世說』『芭蕉翁消息集』『三册子』等を刊行いたしまして、芭蕉の紹介に努めたのであります。其『初懷紙』百韻の前半に對する芭蕉の註解と稱するものを、どこから手に入れたのであるかは明らかにいたしませんが、それを『花故事』に編入いたしました。それに誤謬があつたといふので、再び『落葉考』に改訂收錄いたしました。出自等を明記いたしませんから、文獻價値は幾分減殺されるのでありますが、彼が忠實な仕事振りに對しては敬意をさゝげたいとおもふのであります。



關更筆(伊藤松宇氏藏)

彼の句は『新五子稿』『三傑集』『芭蕉堂三代集』に編入されてをりますが、單行本としては『半化坊發句集』だけであります。彼は句集出版など念頭に無かつたのでありましたが、門人達がかれこれ心配の末、嶋水が自らも集め、又同門車蓋の集めたものをも一所にして、編纂上梓したのが此書でありまして、時は天明七年彼の存生中でありました。

彼は寛政十一年五月三日享年七十三で歿しました。東山高臺寺に葬りました。

○

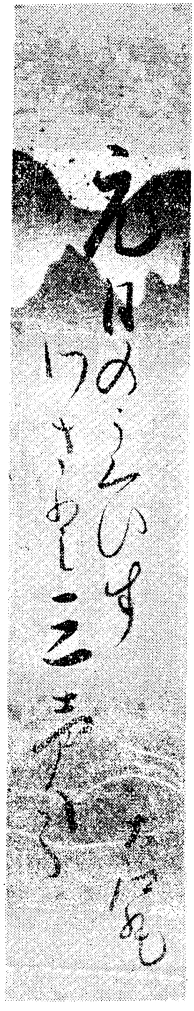
俳懺悔　半紙本　二冊

大阪の飛脚問屋島屋の主人で、家業のため江戸をはじめ各地に旅行をし、又十三四の頃から淡々などの所

蘭更（半化坊）像

へ出入した大江丸は、健康で筆まめでそして長壽でありました。其隨筆的句錄の『俳懺悔』及『俳諧袋』の二書は彼の句風や好尙を知ると共に、彼の交遊した人々の片鱗をも知り得るもので、共に一讀すべきものであります。前者は寛政二年、後者は享保元年に大江丸が自ら編し自ら書し自ら出版したものであります。本集には他の人々との鈎衡上前者だけを收錄いたしたのであります。

大江丸は若い時代に江戸の活々坊舊室の門に入りまして、芥室舊國（ふるくに）（又舊州）と稱しましたが句作に身を入れる事もなかつたのであります。家業上多方面の人々と交際するので、俳諧も茶や謠などと同樣な藝能の一つ位に心得てをつたのでありませう。多才多藝な彼は格別力を盡さずして當時の大家仲間にはいつたのであります。それは無論家業の關係も與つて大に力あるものでありませう。ある年松島に遊んで終夜月光の下に呻吟して一句を成し得なかつたのであります。曉に及んで蓼太の「朝きりやあとより戀の千松島」の句の玄妙に感じ、長い間の自慢の鼻を折られたので、歸途直に蓼太の門にはいつたのであります。『俳懺悔』の書名も



大江丸筆（伊藤松宇氏藏）

こゝに基くのであります。

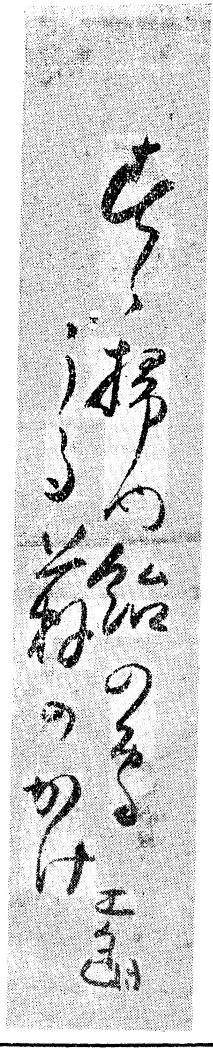
彼は文化二年三月十八日に歿したのでありますが、其享年に就て異説があります。それは彼自身が此書巻末に記した寛政二年六十九から推算しますれば、歿時は八十四になるのでありますが、『俳諧袋』の享和元年を八十二と自記してをるのから勘定すれば八十六になるのであります。卽ち寛政二年の六十九から享保元年の八十二までの間に二年の相違を生じましたので、何れも彼自身の記した所であります年寄達のうちには七十九の年を七難九厄として忌んで、七十八から八十へと飛ばして算へる人があります。大江丸の二年違ひもかういふ類ではないでせうかとおもはれるのであります。

○

大江丸（舊國）像

枇杷園句集　半紙本　二冊

産科で名高い專庵先生は卽ち枇杷園士朗であります。名古屋の人井上正春と申しまして曉臺門の逸足であります。平家琵琶を好んだので枇杷園と號し、庭前に赤松の老樹があつたので朱樹叟とも稱しました。彼は筆まめ手まめであつたと見へまして、小册子の編著が澤山あるのであります。人によつては賣名的出版と考へられるかも知れませんほどであります。其うち文化七年に出した『枇杷園隨筆』は芭蕉一派に關する文獻を



士朗筆（伊藤松宇氏藏）

收めてありまして、相當の資料價値を持つてゐります。『鶴芝』は享和元年の春士朗が門人松兒卓池等を引連れて、富士の鶴芝を見ると稱して旅途に上り、江戸へ出て道彥成美等と交遊を重ね、信州上田松本飯田を經て名古屋へ歸つたときの紀行であります。『士朗五七集』と申すのは、天明二年の『留主懷紙』から、文化九年の『文化五歌仙』まで、其折々に出した所の小出版が三十五部ありまして、それを七部づゝ組合はせて『士朗

七部集』として初編を文化二年に、あとはつぎ〳〵に出したのでありましたが、のちに之を一とまとめに、五冊ものとして出したのであります。

彼の句集は門人卓池椿堂蕉雨宇洋松兄等の共輯で、文化元年に出版されてをります。外に門人梅間が編して文化八年に上梓した『枇杷園類題發句集』小本二冊がありますが、卓池等のは士朗の生前出版でありますから、之を編入いたしたのであります。

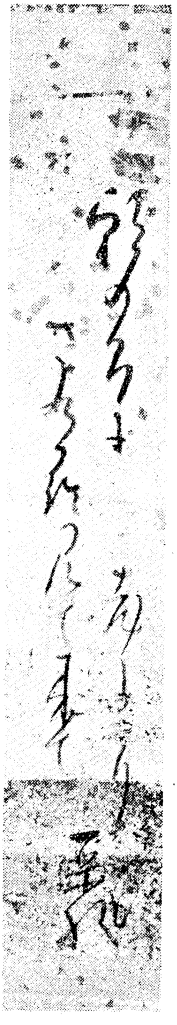
士朗は國學を宣長に繪を范古に學びまして、至つて多能であつたやうであります。文化九年五月十六日に歿しました。享年七十一であります。名古屋市中區新榮町四丁目朝日山照運寺(曹洞宗)に葬りました。別に中區古渡町龍泉寺(眞言宗)に遺愛碑があります。近年名古屋の人々が朱樹會を組織いたしまして、士朗等の事蹟顯揚に努められました。只今は元祿時代まで溯りまして、名古屋俳人に關する展覽會を年々一回開催する事となつたさうであります。

士朗像

○

曾波可理　半紙本　一冊

『そばかり』は巣兆の句集でありまして、前半春夏の部は巣兆が自ら撰み自ら書いたものでありますが、後半の秋冬は門人加茂國村が師の歿後に撰み且つ書いたので、そのまゝ板にいたしたものであります。



巣兆筆（伊藤松宇氏蔵）

巣兆は武藏千住の人、建部氏、名は英親字は族父と申しまして、書家山本龍齋先生の子であります。故あつて關屋の里に住んでをりましたから、世間では關屋の巣兆と申しました。自雄門で秋香庵小蓑庵貢雀園寒葉齋菜翁などの諸號があります。繪畫に巧みでありまして、其落欵に押捺する印章は父龍齋が使ひ古した所の「松甫」といふのを、少し斜めに押すので有名であります。それほど無邪氣なのでありますから、巣兆の俳畫は實に高雅なものでありまして、ある人などは天下一品だとさへ激賞してをると聞きました。龜田鵬齋谷

文晁などと親交がありました。俳壇では成美道彦と共に江戸の三人と目せられたのでありますが、人品の高いのでは巣兆が傑出してをるのであります。

巣兆は文化十一年十一月十七日歿しまして、淺草北寺町の日輪寺に葬りましたが、其享年は不明であります。

○

成美家集　半紙本　二冊

淺草藏前の井筒屋八郎右衞門といふ立派な札差の御主人でありながら、枯淡な俳人生涯に甘んじて、一蓑一笠の行脚坊主をも平等に待遇したのは成美であります。成美は夏目氏で、代々八郎右衞門と稱したのであります。成美の父は淺草天王町の伊藤源兵衞の三男三次郎で、夏目家へ養子に來たのであります。成美一家は健康に惠まれませんで、成美の兄に當る四人の男兒は皆夭死しましたので、成美も生れると直に伊藤家に預けられ、泉太郎と稱して三歳まで育てられたのであります。十七歳家督を嗣ぎましたが、其翌年痛風を煩つて右足不隨となつたのであります。其三十四のとき弟庄兵衞に家を讓つて、隅田川の對岸多田藥師の傍らに小庵を結びましたが、其翌天明三年七月二十三日に庄兵衞が歿しましたので、彼は再び家藥

巣兆像

を見なければならないのでありました。かくして彼は半俗半雅の日を送つて、文化十三年十一月十九日に六十八歳で歿しました。下谷下車町蓮華寺に葬りました。等覺院成美日濟居士は其法號でありまして、乙二が「成美はひたと題目にかたぶき」と申されました通り彼の宗旨は日蓮宗でありました。

成美の俳諧は誰に學んだといふ所謂師傳關係はないのであります。彼の父は隨時庵一雨（のち宗成）と號して俳諧をいたしましたから、成美も見やう見まねで覺え込んだとおもはれるのであります。元來藏前の旦那

成美筆（併藤松宇氏藏）

樣方は俳諧を遊藝の一つで、知つてをらねば何かの場合に恥をかくから習つておく位の程度に、輕く見てをつたと信ずべき理由があります。祇空の指導による四時觀の時代かち、又札差なる業務が泰平になればなるほど利益が多くなつて行く立場にある關係から、俳諧は遊戯化して行くのであります。其環境雰圍氣の中に育ちながら、成美の俳諧が藏前臭氣を帶びないのは、彼が所謂師傳關係を有せず、獨歩研鑽を進めて行つたからであらうとおもはれます。成美は輕い筆致の俳文をよくしました。當時盛行した「配り本」などの序跋は

殆んど成美の筆ならざるはなしと申してもよろしいほどであります。其文集を『四山藁』と題して文政四年久臧包德包昌包壽の共編上梓する所であります。『隨齋諧話』は彼の隨筆でありまして、彼の識見の一片がほのめいてをるのであります。『芭蕉七部集註解』は未定稿で出版にならなかつたやうであります。外に『淺草ほうど』『鼠の道行』などの編著が出版されてをります。其句集に二三種あるやうでありますが、本集に編入したものは其男諫圃子强の校合、門人久臧（番頭の一人にて俳諧の門人なる由、豐島氏。のちに由誓と改めました）の補定で、成美の歿する年に上梓したのであります。『はら〳〵傘』と題した自筆の句集稿本があるさうであります。

成美は名を包嘉字を蔦蹄と申し、父の隨時庵に倣つて隨齋と號しましたが、脚疾にかゝつてからは不隨齋と稱し、家を弟に讓つて多田森へ隱

成美像

時したときは贅亭と呼びました。大必山人四山道人などの別號もあります。此時代の俳人で江戸に住むものは勿論、他國のものでも一たび杖を江戸に入れたもので、成美の世話を受けないものはないのであります。札差の旦那様でありながら腰が低いのでありますから、當時彼に對しての嘖々たる好評はすばらしいものでありまして、強ち、富豪に阿ねるの聲ばかりでは無いのであります。

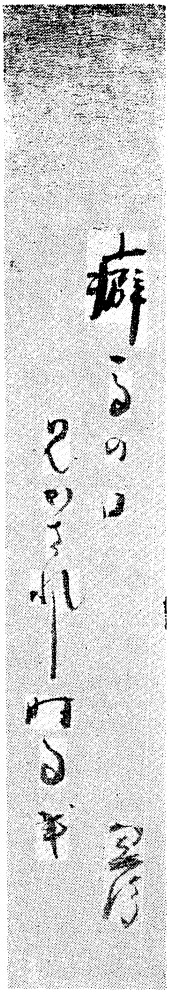
塵境に身をしたがへて靜なるいとまなし。たゞ日くるれば俗事おのづからしりぞきて、しばらく寸心をやしなふ。

人に遠し宵よりこもる蜥の山

の一句はよく成美の面目を傳ふるものとおもふのであります。

○

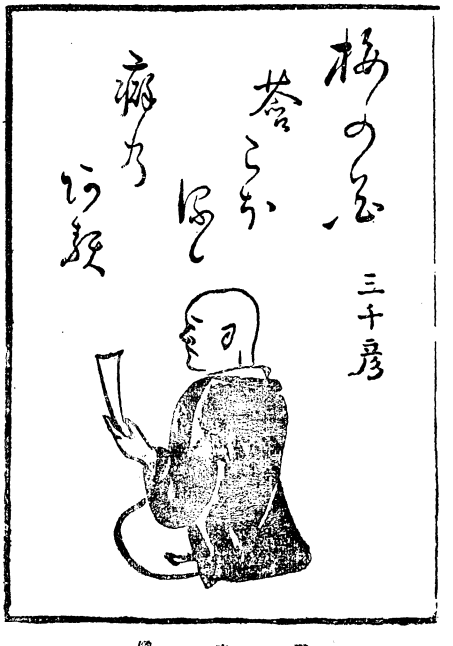
蔦本集　半紙本　二冊



道彦編（伊藤松宇氏編）

春秋庵白雄八大弟子の隨一人として、江戸日本橋石町に高く門戸を張りました道彦は、仙臺の人鈴木氏でありまして、町醫を開業してをりました。いつの時代でもお醫者さんは、職業的に世間が廣く且つ世間から尊敬されるのでありますから、道彦が時代の寵兒として雄視してをりましたのも、彼が俳諧技倆だけとは考へられないのであります。まして成美といふ力強い推挽者があるのであります。いはゞ道彦は幸運兒であります。

『道彦七部集』といふものがありますが、其うちの『蔦の眼』は士朗一派の連句三卷を道彦が批評したもので、彼の識見を知るべきものであります。（『蔦の眼』は『士朗五七集』にも編入してあります）又『畑芹』附錄といふものは乙二道彦の共著らしいのでありますが、彼等の作句信條を示したものと解すべきであります。道彦は發句より連句が優さつてをつたではないかとも考へらるゝのであります。發句はまだ脫俗



道彦像

し切らぬ所がありますのを遺憾といたします。其句集なる『蔦本集』は彼の自撰でありまして、出版年月未詳でありますが、鵬齋の序文があるのと、集中の發句の前書に文化三年うるま人云々とあるのによりまして、文化四年から九年までの間と推定いたします。『續蔦本集』半紙本二册は門人氷狐の撰で、天保九年初冬の出版でありますが、道彦の發句の一斑は『蔦本集』だけで足りるとおもひまして除外いたしました。

彼は十時庵と號し、又金令舍とも稱しました。「鈴」の字を割つたのであります。文政元年九月六日歿しました。歿年六十三であります。淺草山之宿の善敎院へ葬りましたが、同院は境内整理の爲め其墓地を巢鴨庚申塚へ引移したよしであります。さすれば道彦の墓は無緣として取拂はれたかも知れないのであります。

○

松窓乙二發句集　小本　二冊

奥州白石千手院の權大僧都亘理清雄といふ名前だけ聞いたのでは、甚だいかめしく感ずるのでありますが

乙二筆（伊藤松宇氏藏）

仙臺の乙二と申せば誰でもすぐにあの洒脫な俳人かとうなづくのであります。彼は修驗者卽ち山伏でありまして、六尺ぢかい大男であつたと申しますから、兜巾篠懸に身を固め、金剛杖を突立てた姿は、如何なる惡鬼羅刹も忽ち降服する威嚴を有したのでありませう。其句集中にも修驗道に關したものが散見いたします。

交通も通信も甚だ不便な時代に、其最も甚しい所の松前へ渡り函館へ移つて年を重ねたと申す事は、單なる俳諧宣傳ばかりとも考へられませんが、とにかく大なる勇氣がたければ決行出來ない事であります。四年ばかりの假寢の庵に「斧の柄」と名づけました乙二の情懷察するにあまりあります。其餘流只今も函館地方に殘りまして、斧柄社は其地の一勢力であるやうに聞いてをります。

乙二像

豐島由誓の編した『乙二七部集』二册は天保六年の上梓でありますが、乙二の識見を窺ふべきもの（『耳さら

へ』『蕪村發句會』『手爾波草』其情懷に浸るべきもの(『斧の柄』『箱根紀行』)など一讀すべきものがあります。『松窓乙二發句集』は門人一具及古翠の共編でありますが、出版年次の不明なのは遺憾であります。其續編が『乙二七部集』のうちに編入されてをりますが、本集には收錄いたしませんでした。

文政六年七月九日歿しました。享年六十九であります。陣場山に葬りました。一女きよ女は仙臺侯の侍醫松井玄圃に嫁しましたが、晝も俳句も出來て溶々と號してをりました。天保十二年六十二歳で歿したのであります。

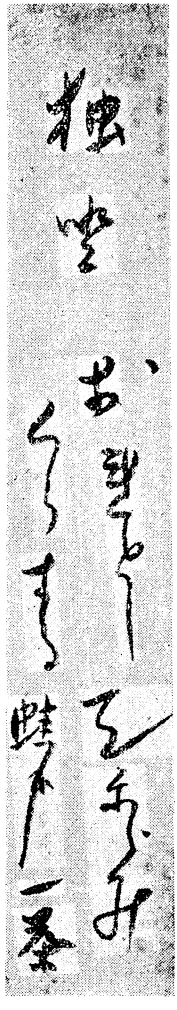
○

一茶發句集　半紙本　二冊

おらが春　同　一冊

どこまでも野性を脫却し得ず、泣くも笑ふも無遠慮であつた點に於て、現代人の心のうちに何等かのつながりを持つ所の一茶は、近來いろ〳〵の人にさま〴〵な論評をせられ、殊に大正十五年は其百年忌に相當するといふので、遺稿出版作品展覽并に法會などの催がありまして、一茶は一層民衆に親しいものとなつたのであります。が、それは卽ち贔屓の引倒しでありまして、一茶の眞相を誤らなければよいと心配するのはひとり私だけではないのであります。一茶は野性其まゝではありません。研いて磨いての上に殘つた野性があるのでありまして、人をして鼻を掩はしめるやうな惡臭ではなく、ある快感を唆る程度の臭氣であります。此臭氣が一茶自身の匂ひであるかも知れません。こゝが一茶研究の要點である事を忘れてはなりません。

信濃の奥の奥なる柏原に生れました彼は幼少から不幸でありました。小林彌五兵衛の長子に生れました彼は、三歳にして母に別れ、十歳繼母に弟の仙一が生れたので、遂に十四のとき江戸へ出たのであります。江戸でどういふ所にどういふ生活をしてをつたのかは判然いたさないのでありますが、俳諧を葛飾派の二六庵竹阿(寛政二年三月十三日歿)に學んだ事は疑の無い所であります。寛政三年二十八歳のとき一寸郷里に歸りましたが、すぐまた出懸けてしまつて、其翌年は關西方面の旅行に上つたのであります。漂遊數年寛政七年、此時三十三歳)の正月は讃岐にあり、其秋は河内方面に在りまして、一茶坊亜堂と號してをつたことを『寛政紀行』『旅拾遺』の二書(共に一茶の遺稿を信濃教育會に於て出版したものであります)によつて明瞭になりました。享和元年父彌五兵衛が病むと聞きまして、下總あたり行脚中の一茶は直に駈付けたのであります。(看護中の日記があります。以て彼と彼の繼母及異母弟との關係を窺知すべきであります)父は遂に歿しました。「仲よくくらせ」と遺訓の幾句も無視されて、兄弟反目の度はますく高まりました。此頃は江戸を中心とし



一茶筆

て附近諸國の行脚をしてをつたのであります。文化五年に漸く財産分配の協定が出來まして、數年來のあらそひも漸く鎭りました。文化九年頃からは郷里を主に、江戸方面を從に行脚しました。十一年故郷で妻を持ちました。五十二歳の花聟とは類の無いものであります。文政三年輕い中風にかゝりましたが、幸に治りまして蘇生坊と稱しました。六年妻きく女が歿しました。きく女を娶つてから四人の子供がありましたが、皆夭死いたしました。一茶は妻が無智で首の据らぬ前に脊負うて、脊負殺したのだと記してをりますが、幼兒が呼吸器系統の疾患を持つてゐたためであらうと申します。八年やを女を迎へまして後妻といたしました。文政十年一茶が俳諧寺と命名した彼の住宅が燒けまして、土藏だけ殘つたので、それに手入をして住んでをりましたが、十一月十九日に六十五で歿しました。小丸山の上の先塋の次に葬りました。當時姙娠してゐたやを女は翌年になつて一女を生みました。やた女と名づけました。これが只今も古屋敷を守られます所の一茶の血統を繼いだ一粒種であつたのであります。宗旨は代々淨土眞宗で、柏原の妙專寺檀家でありました。一茶の勞苦を味はずして、たゞその野性のみを謳歌するの當を得ざる事は申すまでもないのであります。

彼の句集に文政上梓のものと嘉永のものとの二種あります。文政の『一茶發句集』は嘉永のに比して編入句數は少ないのでありますが、門人達が分擔しての編纂校定でありまして、信據を置かれるものと認めまして採錄いたしました。『おらが春』は文政二年一ヶ年の日記らしく見えますやうに、同年の句文をはじめ、前前からの句や文やを工合よく排列編次したものでありまして、稿本が某所にありましたのを、嘉永年代に白井一之が之を模刻出版いたしました。其時册尾に一之西馬逸淵等の脇起連句や其他の發句連句を附載したのでありますが、再刷の時題筌を『一茶翁文集』と改め、且つ附載のものを全部削り去つたのであります。近年

一茶眞蹟の稿本といふのをコロタイプにして出してをります。此板本のものと多少文字の相違がありますが何れを正しいとも斷定いたしかぬるのであります。蓋し一茶が淨寫しながら改訂を加へたかも知れないのでありまして、此事實を認めても、どちらが改訂を加へない前のものであるかは到底わからないのであります。

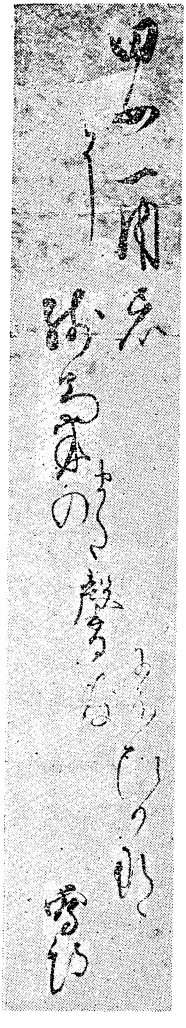
○

屠龍之技　大本一冊

昭和二年は抱一上人の百年忌に當りますので、例によつて記念展覽などがありまして、岩崎の靜嘉堂文庫に深く藏せらるゝ所の『輕舉觀句藻』二十卷が出陳されたのであります。是は申すまでもなく抱一上人自筆の句稿でありまして、上人の生活記錄とも申すべきものであるのであります。此中から拔抄して板にしたものが卽ち『屠龍之技』でありますが、其板下は上人の筆蹟であり、拔抄は上人自ら行はれたと申すので、此『屠龍之技』亦俳壇に珍重せらるゝものであります。此板本に二種ある事を今回はじめて氣付いたのであります。本集編入に就ては例の松宇文庫靑印本によつたのでありますが「うめの立枝」の條で「歸去來」と題して「歸なむ居酒」の句から「古田高麗　茶盌を」と前書ある「幾時雨」の句へとつゞいてをるのでありますが、帝國圖書館本では、此二句の間に「春興」と題した「うぐひすの口」の句から前書に「至日」とある「冬至梅」の句に至る百三十八句十四枚半を增してをるのであります。竹冷文庫本は表紙を其一が畫いた寫本でありまして、其筆蹟は板下はよく似てをるのを見ますれば、抱一門流の人の筆寫であらうとおもはれるのでありますが、同じく此百三十八句を含んでをります上に、「補遺」として五十三句を追記してあるのであります。此松宇文庫本に

無い所の百三十八句を點檢いたしますに、文化十十一の二ケ年に亘るものである事がわかりましたのであります。鵬齋の序の九年、蜀山人の跋の十年に書かれたのから考へまして、初めは文化十年頃所謂自費出版で出したのであつたが、同十二年の頃二ケ年分を追加改版したものであらうと推定いたしました。依て松宇文庫青印本を基礎とし、之に竹冷文庫寫本を參照して、内容を圖書館本と同一ならしめましたのであります。

上人は幕府の親藩姫路の酒井家の御次男様に生れまして忠因と名乘りました。柔劍弓馬の武藝から繙書



抱一筆（伊藤松宇氏藏）

習字など、當時士分の少年として學ぶべき事柄はひと通り修めたのであります。安永九年二十歳のとき大手上屋敷のお長屋に引移りました。武家一人前として、又臣下の一人としての生活が始まつたのであります。併しそれは表面の捉でありまして、内實は矢張り御次男様らしい呑氣な、責任の無い其日を送つたのでありますから、所謂部屋住みの閑散な身でありますから、文學や遊藝に親む機會は甚だ多いのであります。まして時は田沼時代であります。兄なる雅樂頭忠以は茶や繪や狂歌を好まれまして、蜀山人などは常に伺候して

をつたのであります。かういふ環境にあつて多能多藝な上人の素質は、忽ち其光りを現はし來つたのでありまして、金春流の太鼓を打ち、楊弓には江戸一の名を博し、刀劍鑑賞は本阿彌をして後へに瞠若たらしむるのでありました。俳諧は馬場存義系でありまして、初名は濤花のち杜陵と改め、更に音通で屠龍と號したのであります。繪畫は歌川豐春に浮世繪を、宋紫石に明畫を學びました。聰明にして風雅な貴公子として世評が高かつたのでありませう。養子の懇望がつもり〳〵て四十有餘家に上りましたが、皆謝絶してしまひまして、寛政九年(三十七歳)病身を申立てゝ西本願寺文如上人によつて薙髪得度したのであります。等覺院少僧都文詮暉眞は得度後の名で、文如上人の準連技といふ特別待遇を受けたのであります。宗家(酒井家)からは千石五十人扶持の手當を受けて京住居をする筈でありまして、行裝美々し京へ上つたのでありましたが矢張病氣を申立てゝ歸東を許されまして、其年江戸へ歸つて千束村に隱栖したのであります。如何なる次第か宗家の手當も中止されて、畫料によつて乏しい生計を立てたので、鴻池の望みによつて描き上げた八橋の六曲屏風の潤筆を、其杜若の花一つを一歩として計算したといふ逸話もあります。晩年には根岸へ移りまして鶯村畫所と稱したのであります。雨華庵と申したのも此頃でありませう。吉原へも出入し、遊女のお弟子があつたり、又其一人と同棲したり、實に自由な氣の向くまゝの生活を樂しんだのであります。「靑すだれ洒落れてござつた坊樣よ」とは岡野知十氏が曾て上人を評した一句であります。しやれてござつたのか或はすねてをられたのか、「風流」といふ詞が强い力で、常軌超脫者を保護する時代には、上人の如きは最も隨喜渴仰されたのであらう事を信ずるのであります。一部の『屠龍之技』はよく此上人の心境を語るものであります

(をはり)